

43. 福岡都心部における那珂川・博多川の水辺利用の変容とその要因に関する研究

宮崎 大

1. 目的

都市における河川空間は、古くは納涼の場や舟運利用など、人が立ち入り様々な活動が展開される場であり、戦後の治水優先の河川整備により人々の生活の場から離れるまで、人々の生活の身近なところにあった。また、近年では河川空間を都市における貴重な自然的空間として見直し、水辺のある魅力的な空間として再認識する取り組みも各地で見られ、河川に隣接した河畔公園が整備されるなど、特に都市河川に多い掘り込み河川で見られるようになった。しかし、それらは隅田川や京都鴨川などいくつかの事例を除いて、過去のように都市活動の場として河川空間が利用されているわけではなく、沿川市街地との関わりが希薄になっているものも多い。

本研究の対象地である福岡市の都心部を流れる二級河川的那珂川と、那珂川水系の準用河川である博多川も近代より、同様の取り組みが行なわれている。博多川の管理者である福岡市下水道局は1991年(平成3年)より「博多川夢回廊整備事業」という名の河川改修を行ない、両岸に高水敷を利用したプロムナードと遊歩道を整備した。また、1994年(平成6年)より「博多川灯明ウォッチング」(地域づくりNPOによるまちおこしのイベント)や、1999年(平成11年)より博多川に隣接する博多座の歌舞伎興行の際に行なわれる「舟乗り込み」が行なわれている。

しかし、今日那珂川及び博多川は都市のエリアを繋ぐ中心部を流れ、このような取り組みがなされているにも関わらず、河川空間を取り込んだ市民による日常的な利用はあまり行なわれていない。

そこで、都市河川における人々の水辺利用のあり方を模索するにあたり、過去に目を向け、積極的に水辺を利用していた時期から、水辺との関係が希薄になっている現代までを歴史的に追うことは重要であると考えられる。

本研究では江戸時代から今日までを対象に、近代より人々の都市活動の場として商業の中心として発展してきた福岡都心部を流れる那珂川及び博多川を扱う。そして、水辺空間の利用形態を調査し、人々が水辺を利用していた理由、過去の水辺利用を支えていた要因を河川と沿川市街地との関係も含めて明らかにし、それらの変容要因を明らかにすることを目的としている。

2. 内容2-1 研究の方法

本研究では、那珂川・博多川における川辺利用の歴史的

変遷を把握するために、戦前からの那珂川・博多川の状況をよく知る古老に対するヒアリング調査、福岡の歴史・郷土資料を中心とする文献調査を行なった。文献調査は福岡県立図書館所蔵の郷土史他の資料や、古地図、絵図、写真集および福岡市博物館所蔵の古写真を中心に行ない、文章・絵図・写真に示された川辺の利用およびその周辺の土地利用関連の情報を抽出し、時系列に整理した。

2-2 那珂川博多川の水辺利用の分類

那珂川・博多川における水辺利用は、多様な利用形式が見受けられた。それらは実際に水に触れることが必要な直接的な河川空間内での利用と、納涼の場や河川を眺めるなどの間接的な河川空間外における利用に大別できる。福岡の中心として発展し高密度化してきた福岡都心部において、那珂川・博多川沿いは数少ない自然的空間であり、アメニティを享受することができる河川空間外での利用も重要な水辺利用のひとつであったことが分かった。

さらに目的別に分類すると、遊び場や佇む場などのオープンスペースとしての利用、舟運や商いの場として水辺の快適さを売りにしたものなどの商業の中での利用、日常の洗濯で河川を利用した生活の中での利用がある。

(1)河川空間内での利用a)オープンスペースとしての利用(A)

河川空間内に立ち入りオープンスペースとして利用されたものは、魚捕りや釣り、水泳などの川遊びがある。さらに那珂川左岸西中洲から春吉にかけて存在した砂州にて、野球などの遊びをする子供達も多く見られた。市街地にまとまった大きさのオープンスペースがない福岡都心部において、堤防がなく、川底の浅い那珂川・博多川は近くに住む子供達にとって格好の活動の場であったと考えられる。

b)商業の中での利用(B)

様々な商業や産業が行なわれていた福岡都心部では河川空間内も商いの場として利用されていた。江戸時代にかかっていた水車、舟運や交通機関としての舟の利用だけでなく、明治時代以降中洲が遊興地になるにつれて完成した料亭街では、川中に生簀が置かれ、護岸にはかき舟や料亭が持っていた屋形船の利用などが繫留された。

c)生活の中での利用(C)

河川空間内での洗濯や障子洗いなどの生活の中で利用されていた。オープンスペースとしての利用同様那珂川にある砂州での利用と、博多川右岸の川縁に住む人が護岸に付く階段を利用して行なわれたも

のがある。

(2)河川空間外での利用

d)オープンスペースとしての利用(D)

那珂川右岸や博多川左岸における河川沿いに歩行空間が存在する場所では、人々が河川沿いの空間で滞留する姿やそこでの散歩、川を眺めるなどの利用が見られた。また近辺の施設の利用者が河川沿いまで滲み出す姿も見られた。

e)商業の中での利用(E)

川縁に建てられた施設からの水辺の景観を楽しむの利用で、主に旅館や料亭街、カフェなど、遊興の場や文化活動の場として利用される施設で利用され、戦前の那珂川でよく見られた。そこで人々は水辺の眺望や涼風を楽しんだという話からも分かるように、それらの建物は河川を意識したつくりになっていたと考えられる。加えて、料亭が保有する屋形船へのアクセスも確保されており、川縁の施設はそれぞれが河川と密接な関わりを持っていたと言える。また屋台や露店のように河川沿いの歩行空間に仮設されたものもある。

2-2. 水辺利用に影響を及ぼした要因

多様な利用が存在していた那珂川・博多川であるが、それらの利用の中には今では見られないものや形を変えながら残っているものがある。それらの水辺利用が何によって規定されていたのか、成立した要因を分析し、水辺利用が衰退・消滅した要因について考察する。

大きく5-1で述べた水辺利用を支えていた事柄と、それらの要因が変化するきっかけとなった、水辺利用に影響を及ぼした事象の2つがある（括弧内は対象となる2-1の利用）

(1)水辺利用に影響を及ぼした事象

a)エポックメイキングな出来事による利用の開始と衰退(ABCDE)

明治20年の第5回九州沖縄八県連合共進会開催、昭和18年の福岡大空襲などのエポックメイキングな出来事により整備が始まり利用が開始・衰退したものがあつた。共進会では主に砂州であつた中洲などの未開の地が整備されたため、戦後の土地区画整理事業では消失した土地に新しく整備をしたため、それぞれ新しい利用が生まれるきっかけとなつた。

しかしそのような出来事によりこれまで培われてきた利用が失われたものも多くあつた。戦後、中洲を取り囲むように那珂川沿いに遊歩道が整備され、それまで水辺利用の核であつた川縁の料亭街等の建物は移転を余儀なくされた。

また、戦争の準備のため、水を貯める理由で那珂川は浚渫され、水辺利用の場であつた砂州は少なくなり、戦災により下水道が壊れ、水質汚染につな

るなど、河川環境に対しても大きく影響を与えた。

b)社会状況の変化(C)

福岡都心部に限らず、社会状況や生活環境の変化により河川を利用する必要がなくなつたものもある。川中での洗濯は洗濯機が普及し始める昭和30年代から徐々になくなり、障子洗いなども住宅の変化に伴い行なわれなくなつたと考えられる。舟運など、舟の利用は明治20年の博多駅完成、明治33年の博多港の完成などにより需要がなくなり徐々に衰退していった。

(2)水辺利用を支えた事柄

a)河川構造及び河川環境(ABC)

特に河川空間内での利用は、河川の水質が大きく影響し、さらに河川空間へアクセスする階段の存在、砂洲の存在等の河川環境、護岸の形状などが水辺利用を支えていた。

博多川では、江戸時代においては舟運や水車など、産業としての利用が盛んであり、それに伴い、川沿いには荷揚場や水車小屋が川縁に建てられていた。そのために設置されたと考えられる棧橋は、川舟へのアクセスを確保するとともに、人が川に沿って自由に移動できるようにもなつており、河川空間を利用しやすい構造であつたと言える。舟運は土砂の流入や港の建設等により長くは続かず、棧橋はその後の絵図・写真からも、撤去理由は不明であるが見られなくなつている。舟運廃止後は川端町の住人により、生活の中で水辺が利用されるようになった。護岸には建物から水面へのアクセスを確保する階段が設置してある建物もあり、川縁に住む人による洗濯など日常生活の中での利用に転用しやすいものであつたのだろう。

b)河川沿いの歩行空間の存在(D)

福岡都心部の中では、那珂川及び博多川河畔は数少ない自然的空間であるが、戦後に遊歩道が完成するまで、河川沿いにオープンスペースがある場所は少なかった。昭和30年頃には、那珂川右岸は及び博多川左岸では人々の散歩の場となつており、那珂川沿いの歩行空間には数多くの露店が見られ、露店の展開の場としても歩行空間が賑わいの場を支えていたことが分かる。

c)河川沿いの施設の立地・業態(D)

河川空間外におけるオープンスペースとしての利用の成立には、川に面したの施設の存在の影響が大きく河川沿いに歩道が設置されただけで利用されるようになるわけではないことが分かつた。戦前から戦後直後にかけては、福岡の都市活動の中心となるような施設や集客拠点となる娯楽施設の多くは中洲に立地していた。それらの施設の前で滞留する人々の写真からも分かるように、河川沿いの施設によりオープンスペースとしての利用が促進されたと考え

られる。いずれもそのような施設と水辺はオープンスペースとして直接つながっており、施設利用者が滞留しやすい構造がそこにあったことが分かる。

遊歩道であった那珂川右岸は、近年では、公園として那珂川河畔プロムナードが整備、建物と遊歩道の間に車道が設置され、周辺施設と水辺の関係性は薄れている。那珂川右岸に並ぶ屋台街など、水辺と都市を結ぶ利用は今でも続くものの、その他の場所における河川沿いの施設・立地は、那珂川に向けたものではなく、那珂川河畔プロムナードは都市から切り離されたままとなっている。

d) 川縁に建つ建物の用途 (E)

屋内から川の眺めを楽しむ利用形態は、多くの史料に記載されているように、那珂川において重要な利用形態のひとつであり、それらの利用を享受する施設は料亭・旅館・カフェなど、それぞれが川縁に建ち、川に向けて客室を展開し、施設の利用者は川の眺めを楽しむことが出来た。また料亭の中には、護岸に階段を設置しているところもあり、屋形船や川を生簀として利用するなど、川中の利用にまで広がっている。業態として、河川空間内での利用を行ないやすいものであったことが分かる。

那珂川左岸西中洲では、戦災に合わずに土地利用が変わらなかつたこともあるが、建築協定により業態を制限する取り組みが行なわれており、那珂川特有の水辺利用が残されることになった。

現在では水質も改善し、親水性が確保された博多川夢回廊プロムナードが河川空間内に設置され、博多川を利用したイベントの開催もあり、水辺を利用する方向へ動き出している。しかし川縁の建物は、一部を除いて、戦後すぐに建てられたような河川空間に対して裏を向いた形のままであり、以前のような河川空間と周辺施設との密接な関わりが復活するような状況ではない。このことが、現在水辺が日常的に利用されていない一因であると考えられる。

e) 大規模施設の立地および対象地の位置付け (DE)

江戸時代には福岡部の防衛線として那珂川沿いに石壁が建てられており、福岡部と博多部を二分するものであり、那珂川が都市を隔てる濠の役割も持っていたことや、江戸期以降も福岡部と博多部それぞれの都市における性格の違いなど、那珂川の境界性が見られた。その後が始まった那珂川右岸での利用のように、対岸の状況や福岡市における中洲の位置づけにも水辺利用に影響している。

例えば、原氏のヒアリングによると、中洲を隔てる博多川・那珂川に架かる「橋を渡る」という福岡市民により使われていた言葉は、「中洲へ行く」ことを意味するとともに、非日常的な場所、つまりハレの場に行き自らを解放することでもあり、当時の庶民の間で飛び交った言葉でもあったということからは、

那珂川及び博多川の境界性、中洲の特殊性が伺える。

また、オープンスペースとしての利用の中には、博多部・博多駅から福岡部・官庁街へ向かう際に河川沿いを歩いている人が多く、賑わっていたというヒアリング結果からも分かるように、広い範囲で拠点の立地にも大きく影響していることが分かる。

しかし、博多駅や福岡県庁が移転し、さらに商業活動や娯楽活動など都市活動の中心が福岡部の天神に移り、中洲が都市活動の中心ではなくなった。現在でも、中洲は歓楽街としての性質は残り、非日常の空間としてあり続けているものの、中洲の賑わいは夜限定であり、那珂川・博多川での昼間の日常的な賑わいが見られない。戦前の賑わいがあった頃のような都市活動を支える基盤が現在の河川沿いにないことも、水辺利用に影響を与えていると考えられる。

3. 結論

本研究では、福岡都心部における那珂川・博多川の水辺利用の変容を明らかにし、その利用が成立した要因、変容した要因について考察した。結果、那珂川・博多川はこれまで河川空間内外で、オープンスペースとしての利用、商業の中での利用、生活の中での利用といった多様な水辺利用を支える場であったことが分かった。またそれらの利用は水辺の歩行空間で佇む利用や、水辺の景観を楽しむことができる客室など、水辺の快適性の恩恵を受け成立していたものばかりであり、河川空間は人々の心を豊かにする力を持っていることを再確認できた。

また、水辺利用は様々な要因により成立していた。それらの水辺利用は、太平洋戦争と共進会という歴史的な出来事がきっかけとなり変容するも、それぞれの利用の成立過程にはそれぞれの理由があることが分かった。

河川空間内での水辺利用は、河川の水質が大きく影響し、さらに河川空間へアクセスする階段の存在、砂州の存在などの河川環境により成立しており、河川沿いの住民の生活環境も変化や舟運業の衰退も変容の一因であった。

河川空間外におけるオープンスペースとしての利用は、河川沿いの歩行空間の存在、商店や料亭、カフェ等と言った河川沿いの施設の立地およびそれらの施設から河川へのアクセス性、官庁街や博多駅等の拠点施設の立地により成立しており、河川構造や河川環境等の河川空間内の状況は大きくは影響していなかった。商業の中での利用は、料亭やカフェなどの施設の業態や川縁に建つ立地、水辺へアクセスする階段の存在や景観を確保するよう建物が造られていることにより、水辺利用が成立していた。

このように、那珂川・博多川における水辺利用は

複合的な要因により利用が成立しており、河川空間内での整備や沿道商店街との連携だけでは不十分であり、都市全体の施設立地からの検討や都市整備につながるイベントの開催など、一体的な施策が必要であると言える。

現在、那珂川・博多川では賑わいの創出に向けたまちづくり活動も行なわれているが、過去に目を向けると、水辺は多様な都市活動を受け入れてきた場であり、周辺市街地と密接な関係にあった。

今後、都市河川における水辺利用を考える上で、歴史的にこれまでの水辺との関係性を把握することで、より個性的な賑わいや水辺が持つ魅力を楽しむことができるようになるのではないかと。

今後は、他の事例や現在における利用実態についても調査を行ない、より複合的に河川空間の整備のあり方について考察を深く進めていくことが必要である。

表-1 水辺利用に影響を及ぼした要因の分析 河川空間外での利用

利用形態	水辺空間構造	場所	利用概要	利用開始のきっかけ	利用年代					利用衰退の主な要因	水辺利用成立要因							
					16 00	17 00	18 00	19 00	20 00		護岸形状	水面へのアプローチ	河川環境	川縁構造	沿川施設	施設の立地	商業	外部要因
オープンスペースとしての利用		那珂川右岸 (西中島橋付近)	明治より大看板が川辺歩道沿いに設置されるなど、人の賑わいがある場所だった。	[1888年] 桁形門の撤去による那珂川の						[1967年] 戦災復興事業による車道の整備、周辺施設から水辺へのアクセス性が悪化。				歩道の存在	立看板	水辺へのアクセス性		対岸の整備
		那珂川右岸 (東中洲付近)	劇場や映画館などの文化施設や飲食店などが川辺歩道沿いにあり、施設利用者による滞留が見られた。	[1945年] 戦災により川縁の建物が消失、跡地が遊歩道に。						[1967年] 戦災復興事業による車道の整備、周辺施設から水辺へのアクセス性が悪化。				歩道の存在	劇場等	水辺へのアクセス性		
		那珂川左岸 (橋口町)	船の係留場があり、川辺歩道沿いにも物産場がありそれらの利用者が滞留していた。	[1888年] 桁形門の撤去により跡地に新道が完成						[1967年] 舟運の衰退及び、戦災復興事業による車道の整備、水辺へのアクセス性が悪化。				繋留所・階段の存在	物産場等	水辺へのアクセス性		舟運の賑わい
		博多川左岸 (東中洲)	川辺歩道沿いに旅館や飲食店などの賑わいの拠点があり、利用されていた。	[1888年] 共進会の開催による東中洲の発展						[1920年頃] 上流の工場排水による水質汚染				水質汚染	歩道の存在	旅館や料亭等	水辺へのアクセス性	
商業の中での利用 (川縁建物)		那珂川左岸 (西中洲)	共進会開催に合わせて未開地を料亭街へ整備、現在は業態が規制されている。	[1888年] 共進会の開催による西中洲の整地。						現在も利用される				階段の存在	川辺の客室の存在			料亭等
		那珂川右岸 (東中洲)	それぞれが川に向けて客室が作っており、眺めを楽しむことができた。	[1888年] 共進会の開催による料亭街の形成						[1945年] 戦災により建物が消失、跡地が遊歩道に。				階段の存在	川辺の客室の存在			料亭等
商業の中での利用 (屋外施設)		那珂川右岸 (東中洲上流)	川辺歩道内に屋台が置かれるようになり、屋台利用者が川辺の賑わいがある。夜のみ。	[不明] プロムナード(公園)整備後、徐々に屋台街が形成						現在も利用される				公園の存在		水辺へのアクセス性		屋台
		博多川左岸 (東中洲)	屋台は一日中設置しているものもあり、中洲の賑わいととも利用されていた。	[不明] 東中洲の賑わいと共に営業開始						[1920年頃] 水質の汚染及び、[戦時中] 避難の為、撤去				水質汚染	歩道の存在		水辺へのアクセス性	

表-2 水辺利用に影響を及ぼした要因の分析 河川空間内での利用

利用形態	水辺空間構造	場所	利用概要	利用開始のきっかけ	利用年代					利用衰退の要因	水辺空間利用成立要因							
					16 00	17 00	18 00	19 00	20 00		護岸形状	アプローチ	河川環境	川縁構造	沿川施設	施設の立地	商業	外部要因
オープンスペースとしての利用		那珂川左岸 など	那珂川に溜まる砂州の上で野球をしたり、石垣に隠れる魚を捕まえる子供が多かった。	[不明]						[戦時中 - 戦後] 水の確保のための砂州の浚渫と、戦後のコンクリート整備。				石垣の存在	階段の存在	砂州の存在		
商業の中での利用		那珂川左岸 (西中島橋付近)	舟の係留場が市によって設置され、拠点のひとつとなっていた。	[1888年] 桁形門の撤去に伴い、船着場が整備						[昭和初期] 交通体系の変化による舟運の衰退				階段の存在	船着場の整備			舟運 桁形門の撤去
		博多川左岸 (中洲)	料亭の賑わいととも、屋形船・かき舟が係留、年中係留されたままのものもあった。	[1888年] 東中洲の発展に伴い営業開始。						[戦時中] 避難の為、撤去				階段の存在	水質		水辺へのアクセス性	かき舟 戦争
		博多川右岸 (川端町付近)	黒田藩による博多川舟運計画による実施、周辺施設も合わせて整備された。	[1753年] 運河計画による舟運の開始						[1762年] 博多川に砂の堆積するため、運河使用中止				棧橋等の存在	砂の堆積	問屋等		舟運
生活の中での利用		那珂川左岸 (春吉付近)	那珂川に溜まる砂州の上で洗濯を行っていた。石畳が川中に敷かれたところもあり。	[不明]						[戦時中] 水の確保のため、那珂川を浚渫、砂州が一時失われる。				階段の存在	浚渫			生活環境の変化
		博多川右岸 (川端町付近)	住居の中に、川中へ行ける階段が設けられている所もあり、それぞれ水辺を利用していた。	[不明] 舟運廃止後も居住者により利用される						[1920年頃] 上流の工場排水による水質汚染				階段の存在	水質汚染	住居		生活環境の変化

[凡例] 水辺利用成立要因 : 成立要因 : 利用の主なきっかけ : 利用が衰退した要因